

〈戦後編〉

マルクスにおける生産諸力の概念について(3)

——生産諸力の弁証法——

(第123巻第3号，1979年，117-131頁)

平 田 清 明

【解題】3号にわたって掲載された論文の最後の部分であり、「Ⅵ 潜勢としての
コミュニズム——資本の生産諸力の弁証法的旋回」「Ⅶ 結語にかえて——人間力と
自然力の回復」の2つの章を取録している。1960年代以降の資本論や経済学批判要
綱の諸研究に基づいて、マルクスのコミュニズムを「個人的（個体的）所有の再建」
や「個人的（個体的）労働力を自覚的に社会的労働力として支出する自由人のアソシ
エーション」として再定義している。市民社会論をベースとするこのようなマルク
スの新解釈は、今日の様々なアソシエーション論の先駆としても評価できる。(1)(2)
は資本論と経済学批判要綱の生産力，社会的生産力，集会的労働者という諸概念を，
詳細に検討・整理しているが，(1)(2)がなくても(3)の大部分は理解できると思われる。
マルクス『資本論』からの引用箇所は（K. 原著巻数 頁数，邦訳書巻数 頁数）のよ
うに略記されている。原著は1957年刊行のDietz社版，邦訳書は1967年刊行の長
谷部文雄訳，青木書店版である。また，マルクス『経済学批判要綱』からの引用箇所
は（Gr. 原著頁数，邦訳書巻数 頁数）のように略記されている。原著は1953年刊行
のDietz社版，邦訳書は1958-65年刊行の高木幸二郎監訳，大月書店版である。

目 次

- I 序にかえて——表象と概念のはざまに——
- II 資本の生産力と労働の生産力
 - 1 資本の生産力の形態性
 - 2 労働の本質諸規定
- III 労働の社会的生産力
 - 1 社会的生産力の諸規定
 - 2 社会的生産力の倒錯性と変革性
- IV 生産諸関係と生産諸力
 - その要点開示——
- V 集会的労働者の概念
 - 資本の生産力の主体的本質——（以上前号まで）
- VI 潜勢としてのコミュニズム（以下本号）
 - 資本の生産諸力の弁証法的旋回——
- VII 結語にかえて——人間力と自然力との回復

* ひらた きよあき(1922-1995)。1978年教授。経
済原論。1986年退職。

Ⅵ 潜勢としての Kommunismus

我々はこれまで、『資本』を主たる引照基準として、そこにおける資本の生産力の批判的概念把握を追跡してきた。

そこに示されたマルクスの理論的営為は、プロレタリアートの革命的自己形成にとって対立的阻害要因をなすブルジョア経済学、また、この学問的形態をとったブルジョア的生活意識を克服することを、直接の目標としていた。その全努力のなかで彼は特に、彼の年来の論敵として現われてきたプルードン（ブルジョアの社会主義としてのアナキズム）が、その準拠基準を古典経済学（特にスミス）に求めていることに注目した。そして、その引照と理解に重大な誤謬があることを指摘しようとした。彼が「集合（総）労働者」の概念を提起して、プルードンの集合力理論を克服しようとしたのは、共通の問題圏の上での正反対の方法概念を明示化するために他ならなかった。

彼の集合労働者→生産的労働者の概念は、ケネーとスミスに代表される英仏両古典経済学の提示した「生産的労働」概念の批判的改作である。これを、前述したように敵対的な二重性として表示し、平和共存的な二重性として提示することを積極的に拒否した。ここに、ブルジョア性との訣別がある。プルードンとの対決もある。

我々が問題にしているのは、生産諸力の主体的モメントとしての生産的労働者=集合労働者である。そしてその対立的二重性である。ブルジョア生産諸関係において成立している資本の生産諸力たる以上、敵対性はまぬがれえない。問題は、この生産諸力の対立的二重性である。それは、その客体的モメントたる生産諸手段の敵対的対立性に対応している。そして、この主体的および客体的モメントにおける生産諸力の自己否定的諸性格は、資本家の生産様式における目的と手段との転倒性を明確に物語るもので

ある。

この転倒性は、生産諸力においては、その主体的モメントたる生産的集合労働者が、対象的自己活動の転倒性を自己克服する必要性（必然性）として貫徹する。そして生産=交通諸関係においては、「資本維持のための資本破壊」を不可避とする事態を、社会的に克服する必然性として貫徹する。いっさいの社会闘争は、この転倒性の再逆転過程に他ならない。

その過程は、個別の諸資本としての集合的労働者が、相互に社会的に連合して、社会的総資本の全社会的連関を、我がものとして再指定することによって、自己自身を実現する過程に他ならない。政治闘争を含む全社会闘争におけるプロレタリアートの革命的階級形成は、いまだ過程的（および転倒的）にのみ出現している集合的労働者が、全社会的個人として顕勢化する過程に他ならない¹⁾。

1) 政治闘争を含む全社会闘争としてのプロレタリアートの工場評議会運動を、アントニオ・グラムシは、本稿でこれまで検討してきたマルクスの概念「集合的労働者」の理論的全意図においてペグライフェンした。彼にとってはこのプロレタリアートの革命的闘争は、資本家の生産様式の発展のうちに「すでに『客観的に』与えられているものを『主体』化しようとした」運動であった。すなわち、資本家的生産様式として「技術発展と支配階級の利益との統一」が展開する「客観的現実」なるものは、実は「新しい『分裂』とその新しい総合」の進行する過程であり、それ自体が「消過的 [= 暫定的] な過程」であるにすぎないのである。そのようなものとして「この過程が被支配階級によってすでに理解されている以上、この階級はすでに、それを理解しているという理由によってもはや被支配階級ではなくなっている。あるいは被支配状態から脱出しようとしているのである」

このようにプロレタリアートの自己解放運動が、資本家的生産様式において形成された集合的労働者の全社会的個人としての顕勢化の過程であることを、グラムシはマルクスから学びとっていた。この点については彼の「集合的労働者」論（『A・グラム

これらの諸点を、以下、数個の諸主題において論述する。

i 相対的剰余価値（社会的個人）の概念

生産的労働は、そのブルジョア的規定性において、剰余価値を創造する労働である。そして特に機械制大工業段階以降においては、相対的剰余価値の創造主体として決定的な意義を有する。「生産的労働者の概念」が「相対的剰余価値の概念」と不即不離にあるものであることが、ここに確認されてよい。

そして次に、相対的剰余価値の概念の展開にあたっては、生産的労働の敵対的二重性が「経済学的な仕方」でこの概念の範疇展開に生きることに留意すべきであろう。

シ選集』第6巻所収、合同出版）が、今日あらたに顧みられるべきである。

なおグラムシがマルクス主義的な意味での革命とはいかなるものであるかについて次のように書き残していることもまた、貴重な教訓であろう。

「共産主義革命とは、すでに存在する経済的諸事象の歴史的認識に他ならない。この諸事象を明るみに出し、あらゆる反動的な企図からそれを精力的に守り抜き、それを法にすることこそ、共産主義革命なのである。つまり、これらの諸事象に、一つの有機的形式を与えて、体系づけるものこそ、共産主義革命である」

したがって「共産主義革命は、経済の分野でも政治の分野でも、生産者の自主性を実現する。労働者階級の（独裁の確立、労働者国家の創設を目指す）政治活動は、新しい可能性に満ちた、自己拡張と自己確立を渴望する経済的諸条件を發展させるに役立つ場合にのみ、真の歴史的価値を獲得するのである」（『労働用具』『A・グラムシ選集』第5巻所収）。

グラムシはブルジョアの「政治経済学」にたいして、マルクスの創設にかかわるプロレタリアートの「批判的経済学」を対峙させ、そこでの「集会的労働者」の概念を、理論と実践とに共通する解放闘争の基礎概念として定置した。「有機的知識人」と「伝統的知識人」との党による媒介＝接合という彼の偉大なテーゼは、遠く、古典たる『資本』の最も深い理論的実践的理解に発している。

純経済学的な論点開示の一端。

私的な諸資本は、その内有する生産諸条件を異にする。したがって、同一部門内での諸資本の生産物は、同一単位資本の産出する「個別的諸価値」の相違として現われる。しかし資本間の競争は、これを「社会的価値」へ平準化する。そしてこの平準化の成立に伴う相対的剰余価値の成立と増大に先んじて、優越した生産諸条件を備える資本のもとに、その生産物の個別的価値を超過する社会的価値部分としての「特別剰余価値」を発生させる。

古典経済学がすでにこのメカニズムをとりあげていた。しかしそこで、自明なものとされていて、かえって概念把握されなかったことがある。次の一点がそれである。

優越生産条件の資本は、他の資本に先んじて、（我々が前節に検討した）社会的・共同的・普遍的労働の生産力を、無償で領有し利用しているということが、それである。したがってまた、他の生産条件におけると同一の労働が「強められた労働」として作用し、その生産物の産出においてより多くの価値「特別剰余価値」を獲得する、ということである。

生産的集合労働者の生産諸力の、資本間競争での発現のリアリティが、そこには確かに存在する。これに類似したことは産業部門間においても見られる。各部門の労働の社会的生産力が「技術的構成」として、その部門間比較としては（技術的構成の価値表現たる）「有機的構成」として表現され、その生産物の「個別的生産価格」と「市場調整的生産価格」との差額が「超過利潤」として表示される。ここでも生産＝および交通諸関係における、生産諸力の区別のダイナミズムが実存する。

上記の同一部門内および異種部門間にあつては、ブルードンの提案した労働紙幣は、その現実的有效性を有しないのみならず、単純に同一ならざる現実のダイナミズムを破壊する結果に終わる。ブルードンの「社会——人格」論とマ

ルクスの「集合労働者」論との相違を最も端的に示す理論表現である。

マルクスは特にこのことを意識していたのであり、「社会的集合（総）資本」の内部連関（「再生産=および流通」）においても、この集合（総）労働者の生産力の無償領有性のもつ意義の重要性について特に注意を喚起していた。「なにも要費しない自然諸力が作用因として生産過程に合体されうるのであるが、その効果の程度は、資本家が何も要費しない諸種の方法や科学的進歩に依存する。生産過程における労働力の社会的結合についても個別的労働者の累積された熟練についても同様である」（K. II 357, ⑦ 463）。

集合（総）労働=協業の利益は、社会的な分業=および交通と密着不可分である。前者は後者の実現形態に他ならない。そして前者は逆に後者の促進要因をなす。マルクスはこのことを次の様に指摘していた。

「労働の生産力の発展が帰着するところはつねに、活動させられている労働の社会的性格であり、社会的分業である。そしてまた知的労働、ことに自然科学の発展である。資本家が利用するのは、ここにおいては、社会的分業という全制度の利益である」（K. III 101-2, ⑧ 145）。

我々はここで本稿における生産諸関係と交通諸関係との内的関連に関する省察を想起こそす必要がある。それによって、『資本』、『要綱』、『貧困』を貫通する思惟の持続底流に彫塑されている理論骨格をさぐりあてることが可能となる。——集合（総）労働者は、生産過程に成立している「直接に社会的な労働」=「共同労働」の遂行者である。しかしそれは、一方では資本のうちに転倒的に対象化された労働の遂行者である。と同時に、それは他方では、社会的交通関係に媒介された「社会的生産過程」において過程的に成立する「社会的=共同的労働」の遂行者である。この意味においてそれは過程的=転倒的な「社会的個人」に他ならない。

この社会的個人が、上述したように、転倒し

た姿態における過程的存在として実存すること、重ねて注意を要する。そしてまた、およそ、勤労諸個人の労働力能が、資本に包摂されて具体的に機能する以前において、またその機能過程においてさえ、潜勢としての自己を形成していることを、顧みる必要がある。全資本=社会のうちには、社会的諸連関を、おのれ自身の内に包摂する生産諸力の基体として社会的個人があるとすることは許される。上記の集合労働者は過程的=転倒的に実存する限りにおいて、潜勢的に実在するものである。

したがって、この意味での社会的個人にとっては総資本の再生産法則は、この集合的労働者の「連合した悟性によって概念把握され、支配されるべき法則」（K. III 286, ⑨ 372）である。そして、「彼らの共同的控制」（ibid.）のもとに置くことこそが、この社会的個人の顕勢化に他ならぬのである。

以上を要約すれば、相対的剰余価値の概念は社会的個人の概念の純経済学的展開に他ならない、ということである²⁾。

ii 生産諸手段の社会性

我々はこれまで、資本の主体的要因たる生産的労働を検討してきた。これに対応する客体的条件たる生産諸手段について、本稿の主題が必要とする最小限の論述が与えられねばならぬ。

生産諸手段は、資本が創造する「国内市場」=および「世界市場的連関」の総体のうちから、調達される。「対外商業」の利益を含む全商業活動の利益を、個別の産業諸資本はそれぞれ享受して、その必要とする労働手段と労働対象とを取得する。間接ながら労働者と資本家の生活手段がそれぞれに確保されるのも、この全市場的連関を通じてである。それらはいずれも、他の資本（社会的労働）の産物であり、その集合労働力=相対的生産性を享受している。したがって、ブルジョア時代においてすでに、これら生産諸手段、とくに労働手段（機械、それを

創造する技術・科学等)において, 社会的であり, 共同的である。ただしそれは, 資本たる限りでの私的性格を揚棄しない。しかしそこにすでに, 労働手段そのものにおける私的性格と社

会的共同的性格との矛盾的二重性が存在している。

このような矛盾的存在においてではあるが, 労働手段の社会的性格は, 労働の社会的性格に先んじて成立し, 後者を「技術的必然」たらしめる(K. I 340, ③ 547 および K. I 404, ③ 630)。資本が, 生産資本としての客体的および主体的な諸条件において社会的な性格を帯びるとき, その貨幣資本形態においても独白に社会的な性格が与えられる。すなわち資本家の生産様式は支配的な「経営様式」として「株式会社」を成立させ, 「会社=社会資本 Gesellschaftskapital」(K. III 479, ⑩ 623)を一般化する。

これは, 「資本家的生産様式そのものの枠内での私的所有としての資本の揚棄」の形態であり, 「資本家的生産様式からアソシアシオンの生産様式への過渡形態」である(K. III 477, ⑩ 621)。

また, この資本家的株式会社の成立の基礎には, 「信用業」が存在している。そして「公信用」も存在する。これらの信用は, すでに「資本所有の潜在的揚棄を含んでいる」(K. III 482, ⑩ 626)。それは明らかに, 生産諸力の巨大な発展と世界市場の創造を促進する一契機たるものであり, 恐慌を含むところの「旧生産様式の解体諸要素」を成長発展させるものである。

この信用および株式会社は, 他面では, 私的資本の最後の存在=展開形態である。そしてそれ自体としては依然, 私的性格によって貫徹されている。このこともまた否定しがたい事実である。そして, それが今日の現実でもある。

しかし, この現実とは, 私的性格と社会的性格との矛盾=および敵対の展開過程として存在するのであって, それ自体の存在を揚棄する以外には, 解決の道を得ることができない。しかもなお自己維持的解決の形態を, 不断に新たに創造すべく, 全力を尽くしつつ, 自己解体の道を歩まざるをえない。

2) 「社会的個人」の概念をマルクスの諸著作において追求した労作としてアダム・シャフ『マルクス主義と個人』(花崎皋平訳岩波書店)がある。この書においてシャフは, 初期マルクスの多少ともフォイエルバッハ的な「類の本質」という哲学的慣用語が1850年代, 特に『要綱』において「社会的個人」という範疇にとって代わられたことを指摘する。そしてこの範疇が経済学的には「社会的諸関係の総体」のうちなる「社会的生産諸力」として把握されていることを検証する。そしてこの社会的個人という社会=歴史認識の基礎概念を発掘することにより, 社会主義的ヒューマンイズムの再建を訴えた。このポーランド・マルクス主義の叫びはユーゴにおける自己管理社会主義と呼応して, マルクス主義における自由と民主主義の再建を旨とする時代的課題に答えようとするものであった。

ユーゴのミハイロ・マルコヴィッチが『実践の弁証法』(岩田昌征・岩淵慶一訳合同出版)において「工業文化のラディカルな人間化の諸可能性」を論じたとき, 彼が認識手段として念頭に浮かべ, 同時代人に呼びかけようとしたのは「集合的労働者」の「社会的個人」としての潜勢という事実であった。「現代の工業文明は, 人間が自己の潜勢的諸能力にふさわしい, 豊かで自由な生活を送るチャンスを増大させてきた。しかし人間はまだ, そのチャンスをとらえる道を見つけていない。」彼がこう呼びかけるとき, 彼は, 相対的剰余価値の生産メカニズムに注目していたのであった。彼は経済学的表現を自著において極力抑制しているが, 彼がそこで歴史理論として強調しようとするものは, 相対的剰余価値の概念が社会的個人概念の純経済学的展開に他ならないということである。

なお相対的剰余価値論の社会=歴史理論としての意義については, 内田義彦『資本論の世界』(岩波書店)「V 相対的剰余価値の理論」が, 同氏『社会認識の歩み』(同上)「II-3 歴史の発掘」および「むすび——学問総合化の二つの道」とともに, 卓越した叙述を読者に提供している。本邦での社会=歴史認識展開の一座標をなすものであろう。

iii 資本家的生産様式における目的と手段との転倒性

この資本そのものの敵対的自己矛盾は、一方での「生産資本循環」(P…P)の推進、すなわち資本そのものの運動過程における「生産(P)の自己目的化」、他方での「貨幣資本循環」($G-W < \frac{A}{P_m} \dots P \dots W'-G'$)の推進すなわち生産の「手段化」(「必要悪」としての措定)という対立的重層過程の進展として現われている。

生産資本循環において自己目的化された生産は、「生産の無制限的拡大」=「社会的生産諸力の無制限的発展」を内蔵している。それは「労働の社会的生産性の絶対的発展[および社会的生産過程の全面的発展]をみぞす傾向を内蔵する」(K. III 109, ⑧ 154)。したがってそれは「人類一般の発展」(ibid.)を促進するものであるはずである。

しかしそれは、資本家的生産の規定的目的たる価値増殖を揚棄しない。したがってまた、資本として増大する社会的支配権力を揚棄しない。それどころか、この規定的目的を実現するための手段として、現実に機能させられている。

この自己矛盾を資本は、それ自体の量的増大(蓄積)によって、克服しようのでなければならぬ。しかしそれはつねに自分自身の制限にぶつかる。この自己解決のシジフォスの運動は、「資本蓄積の絶対的一般的法則」として展開する。この法則は、資本の運動の全過程を通じて展開するのであり、資本家社会の外面においては「利潤率の傾向的低落法則」の進展(それを阻止する諸要因との闘争における進展)として現われ、このブルジョア社会の内面においては、「相対的過剰人口」の創造として、「一方での富の蓄積と他方での貧困の蓄積」という階級的対極性として現われる。一方での「貧困・労働苦・奴隷状態・無知・野性化および道徳的墮落の蓄積。」他方での「享楽・有閑生活・上流社会・街学・エレガンス・および道徳的頹廢の蓄

環。資本間競争における尖鋭な諸矛盾が、恐慌・癱瘓=および価値・素材破壊として荒れ狂う。弱小資本の巨大資本への吸収(集中)、これと平行する過剰人口の顕在化、就業労働者の労働条件悪化、資本と労働との社会闘争の激化、等々がこれに続く。

この全過程をマルクスは、利潤率の傾向的低落法則の「内的諸矛盾の展開」として集約的に表現し、次の言葉で結んだ。

「資本蓄積の増大は資本集積の増大を含む。かくして資本の力は増大する。すなわち、現実的生産者に対立する社会的生産諸条件の、資本家に人格化された、自立化が、増大する。資本はますます……社会的力(gesellschaftliche Macht)として現われる。ただし物象としてである。しかも、物象を通じての資本家の力として社会に対立するところの、疎外され自立化された社会的力として、現われるのである。資本がその姿態で現われるところの普遍的な社会的力と、この社会的生産諸条件への個別的資本家の私力Privatmachtとの矛盾は、ますます激しく発展していく。そして、この関係の解消を含む。けだし、この関係の解消は同時に、生産諸条件の普遍的・共同的・社会的な生産諸条件への転化[自己産出]を含むからである。そしてこの転化は、資本家的生産のもとでの生産諸力の発展によって、またこの発展が行なわれる仕方様式によって、表わされている」(K. III 293-4, ⑨ 391-2)。

『資本』に記されたこの「転化」すなわち敵対的矛盾の揚棄。これは、資本家的生産様式における、かの目的と手段との転倒性の再転倒に他ならない。

このことを『要綱』は次の様に指摘していた。「逆転と転倒は現実的なものであって、単に思念されたものではない。……それどころか、明らかにこの転倒過程は、単に歴史的な必然である。それは、一定の歴史的出発点すなわち土台に立脚する生産力の発展にとっての単なる必然

性であって、生産の絶対的必然性ではない。むしろそれは消滅していく必然性である。そしてこの過程の(内在的な)結果と目的は、(Gr. 636, IV 702)。この過程の形態とともに、この土台それ自体を揚棄することにある」(Gr. 716, IV 795)。

この転倒過程³⁾において遂行される「自己維持の条件としての暴力的な自己破壊」(Gr. 636, IV 702)。これは峻厳的確な次の「忠告」を与える——「資本よ、去ってより高い社会的生産段階に席を譲れ」(ibid.)。

iv 社会的個人の顕勢化としての革命的階級形成

資本の支配の経過的性格は、以上のうちに展望されたように、資本の敵対的運動そのものによって示されている。

しかし、この経過性は、資本に対するプロレタリアートの階級闘争によって闘いとられるものである。したがって、この闘争における敗北は、この経過性を永続性に(一時的ながら)変貌させる。

この帰趨定かならぬ闘争において、プロレタリアートの革命的階級形成を醸成し促進するのは、資本の側からの敵対的運動にたいする階級的自己防衛欲求である。そしてまた資本自身が自ら産出せざるをえない(転倒的ではあるが)歴史形成的な諸契機の換骨奪胎としての再措定である。前者は、経済学的に「労働力の価値以下への労賃の低下」および「搾取度の増大」として表現される社会的な搾取と抑圧に対抗し

て、階級としての自己の存立を防衛する欲求=能力である。後者は、資本が一方で相対的過剰人口を体制的に創造して顕在過剰者を切り捨てる反面、社会的需要の変動に対応する労働者側の「労働の転換・機能の流動・労働者の全面的移動可能性」(K. I 512, ③ 774)の必要を前にして、労働者階級が、資本にとってのこの「死活条件」を逆手にとって、階級としての自己を「全面的に発達した個人」に完成させようとする「社会的な欲求」(K. I 513, ③ 775)であり、その実現能力である。この「社会的欲求」は「社会的に発達した人間的欲求」(K. III 287, ⑨ 374)としての質をそなえたものであり、その端初的な要求として「教育および保険条項」の労働法体系における獲得を含意している。この積極的に新たな自己形成 (Neubildung) の欲求は、労働過程と教育過程との結合 (教育と体育および労働との結合) を、資本としての死活条件の基礎の上に、実現する。また、その労働力防衛闘争において (相対的剰余価値生産の対照として) 獲得されうる労働時間の短縮の基礎のうえに、資本が期待するものとはおよそ質を異にする社会的自己形成を、おし進める。そして、このことは、政治の社会過程への還元を内包する⁴⁾。

これらの消極的および積極的な諸モメントを創造するもの。それは、資本のもとに資本の生産力として形成された社会的集合 (総) 労働者の生産力である。

この集合 (総) 労働者は、前節で指摘してお

3) 資本家的生産様式の展開における目的と手段との転倒は、領有法則の転回における否定の否定の弁証法の展開に他ならず、それはまさしく労働の社会的諸力の経済的に疎外されざる実現であることによって、新社会、新知識創造という史的=弁証法的唯物論の根底をなすものである。この点については、拙稿「個体的所有概念との出会い——中の続」(『思想』1975年12月号)を参照されるよう希望する。

4) 資本家的生産=および蓄積様式の展開に伴う労働過程と教育過程との結合、政治過程の社会過程への還元は、根本的には労働過程の社会化と科学過程化の上に成立するものであり、それら全体が資本主義体制内において、しかもこの体制を越えて展望されうるところに労働日短縮の全意義が存在する。拙稿「自由の王国と必然の王国」(『思想』1971年1月号)および花崎舉平『マルクス主義における科学と哲学』(社会思想社)第3章「社会的生産の視点と論理」を参照されたい。

いたように、現実のブルジョア社会において過程的に（そして転倒した姿態で）成立する社会的個人である。それは、その資本なる物象の支配を廃絶して、己れ自身の決定に代えることによって、その転倒性を克服することができる。しかし、この自己決定は、社会的自己決定である他ないものである⁵⁾。すべての個別的諸資本

の集合（総）労働者が、それぞれの資本物象の支配に代って自己決定権を確立しうるためには、資本家社会に盲目的法則として君臨する社会的再生産法則を、自己自身の「総生産的連関」としてベグライフェンし、共同のコントロールのもとにおきうるものが、不可欠である。「共同の生産手段をもって労働し、協議されたプランの上に（自覚的に）自らの個体的諸労働力を一つの社会的労働力として産出する、自由人の連合」(K. I 84, ① 181)を形成することが、そこに展望される。この展望にとって、この社会的自己形成にとって、直接の（ただし体制的な）制約となるものは、賃金形態を利潤・利子および地代の諸形態とともに自明な所得範疇とする「経済学的三位一体範式」である。そして「資本家的領有法則」およびその基礎としての「商品生産の所有法則」である。これらの上に成立するブルジョア的な政治・社会・文化の諸制度が、プロレタリアートの階級的自己形成を阻害すること、いうまでもないであろう。

しかし、資本にとって致命的なことは、資本がその転倒的な自己運動のなかで自己の「墓掘人」を創造するということである。それは、不幸な自己活動者たる生産的労働者の

5) 集合的労働者の自己決定が社会的自己決定として展開される他ないことはほとんど自明である。問題は具体的な形態であるが、これは、集合的労働者が形成定置されている客観的諸条件と主体的諸条件によって規定される。したがってそれは、資本主義という経済体制と民主主義という政治的制度の歴史的發展段階に条件づけられている。

このことは1968年以来、西欧諸社会における社会主義の自己革新運動における主要論点をなすものとして、広範かつ深刻に論議されてきた。今日フランス、イタリア等ではますます重大な論争点となっている。ほとんど枚挙のいとまのない諸論議のうちで、社会党マルクス主義少数派 CERES がその機関誌『Repère』No. 50-51 (1978年5月)において行なったシンポジウム「神格化された民主主義」は、社会党諸派および共産党の理論的指導者の共同討論であるという意味において重要であるばかりでなく、今日追求されている社会的政治的諸闘争の主要環節がどこにあるかを明示している点で、本稿本文での理論的省察にとって参考の資たるものであろう。このシンポジウムは、「経済と政治との再統一」のための「社会闘争と政治闘争との有機的結合」を志向するうえで、次の諸環節の重要性を指摘している。

A-1 「政治的行政的諸制度の非集権化」と「生産システムの非集権化」との同時展開

A-2 社会生活の全局面および国家装置の全機構への「労働者の効果的コントロール」の実現。

A-3 国有化企業を含む全公共企業での「工場評議会型労働者参加」の実現

B-1 「生産諸部面の再組織化」における「企業の計画化諸階梯」と「地域権力の計画化諸階梯との統一」。

B-2 主要資源の配分、外国貿易、労働時間、賃金表、銀行金利等のナショナル・プランニングの民主主義的作成。

B-3 政治的諸機関と行政的諸組織の「諸権限の自治体への移譲」。そしてこの自治体そのものにおける「直接民主主義の徹底化」。

C-1 「弱体化された中央国家装置と行政諸組織」との「社会によるコントロール」。この形態での間接民主主義の活性化。

C-2 「行政活動透明原則」の尊重、その実現。市民による情報獲得権の実現。

C-3 公共サービス機関についての「利用者協議権、または参加権」の確立。

以上の諸環節において政治過程を社会過程に還元し、そこに新しい社会と文化を創造する拠点の構築に成功しえてこそ、社会主義の理論と実践が今日語るに値するものとなるのであろう。この点については拙稿「フランス左翼の自己革新」(『エコノミスト』1978年9月12日および19日号)を参照されたい。

規定(使命)におけるプロレタリアートである⁶⁾。それは、本稿がこれまでに縷述してきた集合(総)労働者、すなわち(転倒した姿態)過程的に出現している。しかも、その総体が資本の「手段」とされている「社会的個人」である。

したがって『要綱』は述べていた。

「社会的個人(体)の発展の異なる二側面に他ならぬ、生産諸力と社会的諸連関とは……資本にとってその狭隘な基礎から出発して生産を行なうための手段にすぎない。しかしそれらは、実際には、この基礎を爆破するための物質的諸手段である」(Gr. 593-4, III 655)。

この社会的個人は、おのが社会的諸連関を自らの集合(総)労働=社会的労働の発現形態として、おのれ自身のうちにとり戻すところの、社会闘争の推進者である。この「とり戻し-revendication」は、資本自体による「目的と手段との転倒」の再転倒=再逆転(révolution)の過程である。

すでに指摘したように、この再転倒は、転倒そのものが、阻止要因を伴ないつつ、誘発し発展させるものである。そしてそこに、「現存する社会的諸関係と、すでに獲得された生産諸力とが、もはや共存しえない」(Misère de la philosophie, éditions sociales 1973, p. 178, 『マルクス・エンゲルス全集』第4巻189ページ)地点が、客観的にも主体的にも成立するであろう。

6) 不幸な自己活動者という生産的労働者の規定は、ヘーゲル『精神現象学』における「自己意識」=「不幸な意識」の唯物論的改作であろう。フランスにおけるヘーゲル研究を画期的に高めた碩学J・イポリットはその著『マルクスとヘーゲル』(宇津木正・田口英治訳 法政大学出版会)の第三部「マルクス主義と哲学」において『資本論』の構造とその哲学的諸前提を論じて、『精神現象学』のこの概念が、マルクスの初期からその晩年に至るまで、深くマルクスの変革的思惟過程のうちに生きたことを指摘し、本稿での私の主題にも示唆するところが多い。

客観的な展開とは、資本たる物質的生产力が、資本たる社会関係に対してとる敵対(恐慌など)である。主体的展開は、資本の主体的本質力たる集合(総)労働者の、資本関係および物質的生产力そのものへの敵対である。そしてこの主体的本質力こそが、前者の敵対的矛盾において、おのれ自身の自己矛盾解決の場を得、かつ前者そのものをも揚棄するであろう。

このことを表現すべく若きマルクスは、「あらゆる生産用具のうちで最大の生産力は革命的階級そのものである」(op. cit.)と述べていたのである。

そして壮年のマルクスは、上記の客体的および主体的展開を視野に収めつつ、『批判』の「序言」に書きのこしたのである。

「ブルジョア社会の胎内に展開しつつある生産諸力は、この[諸個人の社会的生産条件から生ずる]敵対的関係の解決のための物質的条件をもまた、自ら創り出す、したがってこの社会形成をもって人間社会の前史は終りを告げる」(MEW. Bd. 13, 1961, S. 9, 武田隆夫他訳『経済学批判』(岩波文庫)14-5ページ)。

ブルジョア社会の胎内に、その資本の生産力としての外的展開のうちに潜勢的な人間的生産力能が形成される。この潜勢力は、プロレタリアートの階級的自己解放(資本=物象の体制的支配の廃絶)の運動において、社会的再生産(=交通)諸関係を、おのれ自身の社会的連関としてベグライフェンし、我がものとして、獲得することにおいて、全面的に自己実現しうるのである⁷⁾。人間社会の前史の終焉とは、このことを語ったのではなからうか。

Ⅶ 結語にかえて——人間力と自然力との回復

最後にマルクスと共に、確認しておきたい。資本家の生産様式の君臨するところ、資本の文明化作用のもとに人間力の破壊と自然力の破壊

が相共に進み、その抑制は、自然のうちなる人間の、自然と手をたずさえた自己回復によってのみ、可能である。人間と自然との間の物質変換そのものを、「社会的生産の規制的法則」として再建すること、しかも人間的欲求の充足にふさわしい形態において体系的に再建すること。これこそ資本家社会揚棄の到達点である。マルクスはフランス語版『資本』において「社会的無政府性はいかなる経済的進歩をも公共災害に転化する L'anarchie sociale fait de chaque progrès économique une calamité publique」(Lachâtre, p. 211) と追記していた。このこと

が、いま再び想起されるべきであろう。

資本の物質的生産力の発展の単純な延長線上に、未来社会を構想することほど、マルクスに遠い思想はない。敵対的二重性として実存する生産的労働者—集合(総)労働者の概念が、なによりもまず、これを拒否している。

マルクスにおける生産諸力の概念は、叙述としての明示のうちに存在する以上に、そこに活かされている黙示のうちに定在する概念である。この概念を宿すものとしてのブルジョア社会の受胎告知。これこそ、マルクスが生涯を賭して書き続けた『資本』なのであった。

7) マルクスにおける「近代社会の経済的運動法則」の「暴露 *enthüllen* = *dévoiler*」とは、かかるプロレタリアートの階級的自己解放運動における、潜勢としての人間的生産力展開の客観的基礎を解明すること、この基礎を覆っている社会的諸形態(外被)の社会的な剥離を通じて、この人間的生産諸力能の現実的展開を必然ならしめることであった。このゆえに、経済的運動法則の暴露こそ『資本』の主題だったのであり、そのための弁証法的方法が不可避だったのである。拙稿「コンメンタル『資本』論」(第一講、課題と方法)(『経済セミナー』1979年4月号)を参照されたい。